

大正期小学校建築と教育実践の連関に関する考察

——「復興小学校」の一事例にもとづいて——

小 林 正 泰

はじめに

近年、子どもの教育環境、とくに学びの場としての学校環境に関心が寄せられており、教育現場では教室環境や学校建築に関する新たな試みが広がっている¹⁾。その際、しばしば批判の対象、もしくは乗り越えるべき対象として取り上げられるのが、戦後大量に建造された画一的鉄筋コンクリート(RC)校舎である²⁾。このRC校舎の起源は大正期にさかのぼり、その原型は、関東大震災後に大量に建設された、東京市のいわゆる「復興小学校」により形成されたと言ってよいだろう³⁾。

しかし、復興小学校は、文化遺産としての近代建築再評価の流れで関心が持たれているものの、学術的研究は限られており、教育学的評価も十分なされていない⁴⁾。復興小学校に関する先行研究⁵⁾を整理すると、RC校舎の建築学的分析と、校舎のマスタープランの概説のみという研究状況である。そのため、拙著「関東大震災後の小学校建築」⁶⁾では、復興小学校の建築計画・建築思想・全117校のデータ分析を教育学的観点より行うことでその全容を明らかにした。その結果、1) 学校建築の教育的機能性、および、2) 地域を中心としての小学校、という二点の特徴が導き出された。しかし、この二点の特徴の妥当性を、復興小学校の個別事例の検討により論証するという課題が残されていた。

そこで本論文では、復興小学校の一事例を、上記二点のうち、1) の「学校建築の教育的機能性」の視角を軸として、小学校の震災復興過程と建築構造の具体的な様相を明らかにする。また、戦前期の小学校建築における設計から竣工にいたる経過や手順は、先行研究では明らかにされていないので、その具体的なスケジュールにも注目したい。なお、本稿では、環境としての学校建築という観点から、校舎だけでなく設備や校地環境等を含め、広義の「学校建築」を分析対象とする。

今回検討する事例は、旧神田区(現千代田区)所在の錦華小学校である。現在は、少子化の影響で、隣接する小川小学校および西神田小学校と統合されて、お茶の水小学校と校名が変わっているが、校舎は錦華小学校のものを使用しており、所在地は大正期から変わっていない。お茶の水小学校には、震災復興期における錦華小学校の史料が残されており、学校側の好意により閲覧することができた学校所蔵文書により、震災復興の詳細な過程が明らかになった。

1. 学校沿革と復興の過程

1-1. 錦華小学校の沿革

はじめに、錦華小学校の創立以来の沿革を整理し、そこから錦華小の性格の一端を見ていきたい⁷⁾。錦華小学校の起源は、明治初期に錦町二丁目旧蜷川相模守の屋敷跡に、野本湧泉なる人物が近所の児童を集めて習字読書の教授をしていたことに求められる。学制が施行されて小学校設立の必要が生じると、明治6(1873)年に地域の有志が野本の塾を基礎として小学校設立の尽力をした。当時屋敷の所有者であった今治藩主の相続人、久松定弘の協力で設立が決定し、野本らを教員にすえた、第四中学区第二番小学久松学校として、同年5月15日に開校した。翌明治7年10月には、同年1月に開設した分校の所在地に新校舎を建設し、同所を本校地と定めると同時に校名を錦華学校と改称した。

明治7年の新校舎設立に伴う寄附一覧には、久松定弘を筆頭として15名の寄附者の名前が並んでおり、うち11名が華族である。また、野本や、大村耕収、西尾松溪といった設立時の教員は、語学塾として著名であった訓蒙学舎⁸⁾の開業願に名を連ねており、他の教員も旧幕臣や開成所・大学南校に学ぶ者が多かったとされる。こうした創立の経緯により、明治10年錦町に学習院が開業するまでは、多くの華

族子弟が入学し、時には宮家の教育係が教員として赴任することもあったようである⁸⁾。卒業生の回想録には、「錦華と云ふ他に比べることの出来ない立派な雰囲気」を感じ、他校に対して優越感をも感じていたとの記述が見られる⁹⁾。大正4年から6年間教員として在職した三浦忠三郎も、同校を「華族学校」の前身であり、進学率がよく優れた先輩が多いと回顧し、東京市内の名門校との印象を語っている¹⁰⁾。

錦華小学校の性格・校風として重要なのは、上記の「華族学校」的性格に加え、同校の大正自由教育的実践が挙げられる。錦華小学校における新教育的実践を主導したのは、明治末から大正半ばまで勤めた高羽幸槌校長、および大正後期から昭和初期まで在任の後藤良平校長、この2名の校長である。

高羽校長は、義務教育年限が6年に延長された年、すなわち明治41年の4月1日に着任し、大正8年5月19日まで在職した¹¹⁾。高羽校長は、教育家であると同時に芸術家でもあった。日本画を橋本雅邦に学び、園邦という雅号を持つだけでなく、その芸術的素養を教育実践に生かすべく、「錦華式粘土細工」を創案した。児童による「錦華式粘土細工」は大正博覧会で銅賞を受賞し、校長自身は文部省から選奨を受け、当時の手工教育界で全国に名を轟かせたといわれる。手工だけでなく図画教育にも力を入れた。「課題作品は規格品しか生めない」との考えから「自由画」教育を推進し、さらに教員向けの講習会を毎週自ら開催した。「自由画」教育はさらに国語教育にも発展し、「随意題」と称する自由課題の作文を実践に取り入れた。そして、毎日1時間目は自習時間とし、問題解決型の自由研究も導入した。このような自由教育的実践の結果、同校の知名度は全国区となり、東京市の「模範的指導校」としての地位を築いた¹²⁾。

後藤校長は、前任の川添誠一校長のあとを受け、大正11年12月8日に着任した¹³⁾。後藤校長は、高羽校長以来の自由教育的校風を受け継ぐように、自ら自学主義にもとづく「自学補導教育」を提唱した。大正自由教育の大イベントといえる、ドルトンプランを発案したパーカーズの来日講演会（大正13年）に教員を派遣し、さらに、生徒の自主性を重んじる教育方針により、昭和2年より学校自治会も実施された。自治会は第3学年以上に学級自治会を設け、毎月一回審議を行い、さらに学級自治会から代表を選んで、学校自治会を組織するというものであった。こうした方針は、同校の震災復興記念誌に記載され

ている「本校教育方針」にも、「独立自治博愛共存の精神の練成」あるいは「児童心身諸能力の自発自展を重んじ適切簡易なる方法洗練せられたる材料によりて自発的学习を補導す」と明示されている¹⁴⁾。次章で触れるように、震災の9ヶ月前に赴任し、震災復興期に錦華小の復興を主導した後藤校長の教育観は、復興校舎の建築に際し影響を与えたと考えられる。

これら校長のほか、早期から綴方を実践し、のちに『赤い鳥』の編集にも関与したと言われる上島（旧姓市川）金太郎訓導の存在が注目される¹⁵⁾。同校の卒業生である心理学者波多野完治（大正6年卒）と、波多野と同級の作家永井龍男（同）が上島訓導との思い出を回想録に記している。とくに永井は、大正2年の3年生の時より上島訓導の綴方教育を受け、卒業後の昭和5、6年頃にはよく『赤い鳥』を読めと言われたようである。また本や服など物質的な面でも一方ならぬ庇護を受けて、「もし今日、多少とも私に社会人としての地位があるとすれば、その大半は上島先生のおかげに依るもので、有難さは筆紙に尽せない」と述べている。

以上述べてきたような、錦華小における自由教育的教育実践の特徴により、同校の創立百年記念誌『錦華の百年』では、「大正デモクラシー教育のさががけ」と自賛されている。

師範学校附属小学校や私立小学校における、いわゆる「大正自由教育」といかに直接の関係があるかはあらためて検討を要するが、大正デモクラシーの時代的風潮を反映して、明治時代の注入主義的教育とは異なる自学的自由教育の実践が行われていたと言えるだろう。

次に、学校建築を中心とした沿革を整理しておこう。まず、学校創立時は、大名屋敷跡地の長屋を校舎として利用していた。その後生徒増加により分校を設立し、明治7年には同地に新校舎を建設したのち、その校舎を本校とした。その時の校舎規模は、普通教室7、教員室・小使室各1であった。その後も引き続き児童数は増加し、明治17年に増築、21年には校舎の一部を二階建に改築、さらに23年には校地を拡張し校舎も新築した。明治41年には義務教育年限が6年に延長するとともに¹⁶⁾、明治10年以降男子校であった錦華小は、女子も入学させることになった。義務就学の浸透による児童数の増加に伴い、明治43年にはついに二部教授をせざるを得ない状況

となった。

そこで、明治45年に校舎を新たに建設することになり、翌年12月には新校舎が落成した。830坪の校地に建てられた校舎は、木造二階建、一部三階建て、普通教室20室の他に特別教室を3室設けていた。また、図書機械標本室や屋内体操場も備え、屋上には庭園も設置された。設備内容や、錦華小の名門校としての性格を考えれば、このとき建てられた新校舎は、当時としては先端を行くかなり充実した設備であったと推測される。

しかし、新校舎落成からわずか2ヵ月半後に発生した神田の大火が類焼し、焼失してしまったため、ごく短期間のうちにまたしても校舎を新築する必要に迫られた。このとき、校地は明治7年から立地していた猿楽町2番地から、現在の校地である猿楽町一丁目6番地（現在の猿楽町一丁目1番地）へと移転することになった。その結果、830坪の校地面積は1600坪へと大幅に増加し、大正4年に落成した新校舎の坪数も826坪から959坪へと拡大した。しかし、この校舎も大正12年の関東大震災による火災で焼失することになるのであるから、約15年の大正年間に、実に3回校舎を新築したことになる。その費用もさることながら、児童や教員、地域社会が経験した苦悩は想像に難くない。

1-2. 被災から復興まで

関東大震災の発生した大正12年9月1日は第2学期の始業式で、地震発生時刻の午前11時58分は、始業式後の職員会議が終わった直後であった。当日の様子が学校沿革誌に生々しく記録されているので、少し長くなるがそのまま引用したい。

午前十時ヨリ職員会議ヲ開キ十一時五十分ト云フニ会議ヲ終リ正（将）ニ久方振りノ昼食ヲ共ニセントテ準備中異常ノ大音響ト大震動ニ遇ヒ一同呆然手ノ施ス術モナカリキ

暫クシテ五百有余坪ノ校庭ニ大震負傷者避難者頻リニ搬出セラレ忽チ溢ルルバカリニ滴ミ又職員一同コレガ救護ニ努メタレドモ臆テ猿楽町方面ヨリ火災起リ火焰朦々刻々学校ニ接近スルヲ以テ全職員手ヲ分チテ重要書類ヲ取纏メ藤原訓導御真影ヲ捧持シテ一先小川小学校へ避難ス

後藤校長ハ校舎ニ火ノ燃エ移ル午後一時半迄踏ミ止リテ焼失ヲ見届ケ後先発職員ト共ニ小川小学校

ニ至リ続イテ小川モ危険ニ瀕セルヲ以テ淡路小学校ニ避ク此処モ亦火ニ襲ハルル危険アルヲ以テ上野へ立退ク途中ノ雑踏筆舌ニ名状シ難カリキ漸クニシテ辿リツキタルハ午後四時半

東京自治会館ニ交渉シテ 御真影ヲ奉安シ一日ノ夜ハ後藤校長高橋訓導ト共ニ警護ス

翌二日ハ上野ノ山亦火ニ襲ハレタルニヨリ 御真影ヲ奉シテ牛込区赤城小学校ニ避難シ 御真影ハ伊藤訓導宅ニ安置シテ後藤校長伊藤高橋二訓導ト共ニ警護ス¹⁷⁾

始業式後、教員同士で昼食をとる準備をしているとき、ふいをついて地震が起きた様子がうかがえる。その後、校庭には次々と負傷者や避難者が搬送され、職員一同がその救護に当たりつつも、錦華小にも火の手が迫り、藤原新訓導らが御真影を抱えつつ他校へと避難した。しかし、避難先も行く先々で火災に襲われ、避難場所を点々とし、最終的には牛込区まで避難することとなった。その際最も注意を払われていたのが御真影の警護であったことが克明に記されている。

焼跡の整理は9月12日から始められ、授業再開の準備が少しずつ進められた。露天学校は10月10日より開始され、出席した児童は男120名女100名の計220名―震災前児童数1505名¹⁸⁾の約15%―で、焼けたトタンを黒板にし、机を座席にして授業を行った¹⁹⁾。学校沿革誌にはこの日の思いが、「大震後ノ最初ノ登校ナレバ教員共ニ感慨無量トイフモ尚余リアリタリ」²⁰⁾と書き記されている。しかし一方では、同月7日より、校地に建設されたバラックへの罹災者収容が開始され、「学校ハ遂ニ罹災者収容所ト化スルニ至レリ」²¹⁾という状況でもあった。その後、12月4日より仮校舎の新築が着手され、同月21日から正式に授業が開始された。震災より3ヶ月以上経ってようやく本格的に授業が再開されたことになる。

新校舎の建築は、震災復興計画にもとづく土地区画整理により、校地が概ね確定してから始まる。錦華小の場合、校舎の竣工が大正15年の5月31日と他校に比べ比較的早い²²⁾、それは同校周辺の区画整理が早く済んだためと言われている²³⁾。

設計から竣工までの工程を大まかに示すと以下の通りである²⁴⁾。まず設計に関しては、東京市によって学校建築の略設計が作成され、その図面をいったん学校に送付する。略設計を受理した学校側はそれに

対して意見書をまとめ市に提出する。その意見書をもとにして本設計が作成される。錦華小の場合は、大正13年6月初旬に略設計が着手されて、完成された略設計図が7月22日に学校へ送付された。学校側において約2か月ほどの検討を経て、9月16日に意見書が提出された。

上述の過程により本設計が完成したのち、区会により建築予算が決定され(12月6日)、その予算額に基づいて東京市から建築費補給の通牒を受けた(大正14年4月7日)。設計図および予算の確定を受けて、学校建築認可の申請が、区長より市長を経由して府知事へと行われた(4月30日)。建築認可が下りたのが、申請より二週間後の5月14日である。建築認可が出ると、入札により建築工事請負事業者が決定され、錦華小の場合は7月28日に清水組が落札している。設計、予算、施工業者が決定することでようやく工事の準備が整う。戦前は建築工事に警察の認可が必要であったため、落札者が決定したその日に警視庁へ建築工事認可の申請を行ない、8月3日に認可されている。着工日は警視庁認可2日後の8月5日、その約10ヵ月後の翌大正15年5月31日に新校舎が竣工した。そして、同年の10月15日から3日間にわたって、講演会、展覧会、運動会などから構成される盛大な落成式が挙行された。落成式は児童保護会、同窓会、町会の三者連合による復興後援会が主催し、当日は岡田良平文部大臣他多くの来賓や地域住民が来校した。

以上、錦華小学校における震災から復興までの過程を時間軸に沿って整理してきた。その中で、本論文の課題に照らし合わせて注目すべき点は、学校建築の設計段階で、設計主体である東京市に対し、学校側が意見を述べるプロセスが含まれていることである。戦前の学校建築は教育実践上の配慮が不十分という通説のイメージに対して、学校建築の設計に学校側の意見が反映されていることを示すこの事実は注目に値する。次章では、こうした教育実践の視点から復興小学校の設計図面を読み解く作業を行いたい。また、復興校舎がどのような存在として児童の目に映ったか、加えて、学校建築の実態が教員側の教育観とどのような関連を持つのかを検討する。

2. 校舎・設備の教育的機能

2-1. 復興校舎の基本構造

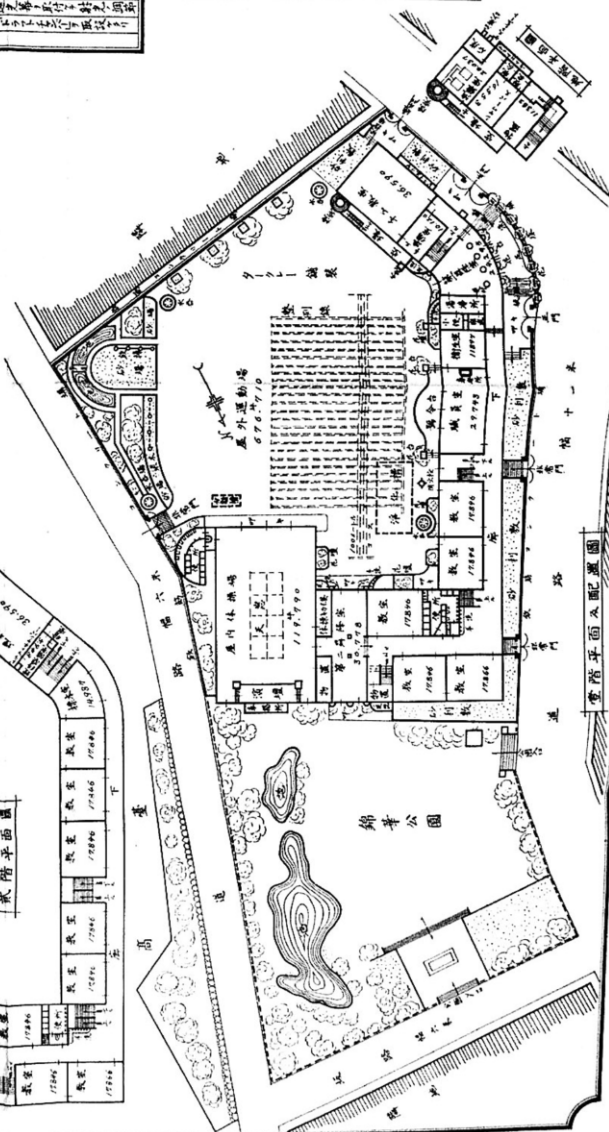
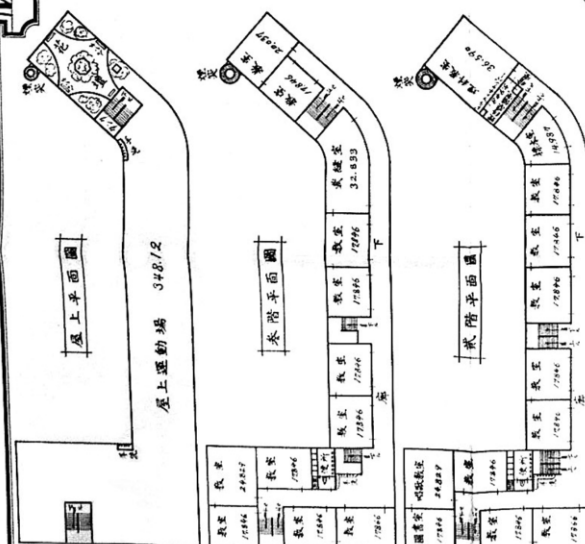
まず、錦華小復興校舎の基本的な構造を同校の建築図面(図1)をもとに見ておきたい。同史料には、各階図面のほか「設計概要」「建築概要」「建築費一覧」の三つの表が掲載されている²⁵⁾。

「建築概要」は、敷地面積は1466.98坪、建坪495.1坪、延床面積は1281坪である。敷地面積は震災前の1600.77坪に比し、8.4%の減少となっている。土地区画整理において、学校の校地は減歩に関して優遇を受けたことが明らかにされているが²⁶⁾、錦華小の場合は、1割が原則とされた減歩の基準と照らし合わせて、標準的な取り扱いをされたと言える。運動場は、屋外が676.71坪、屋内が119.79坪で、さらに運動場の狭さを補填するために作られた屋上運動場も348.12坪あった。「設計概要」の「構造」欄には、本校舎が鉄筋コンクリート三階建て、屋内体操場は鉄骨鉄筋コンクリートの平屋建となっており、東京市の決定方針を踏まえた構造になっている。また、「絶対耐震耐火構造」とその安全性がアピールされている。

次に「建築概要」の表に、教室・施設を確認すると、普通教室は24室、特別教室は理科・手工・裁縫・唱歌の4室ある。特別教室は、東京市が標準と定めた理科・手工・裁縫・唱歌・図画²⁷⁾のうち図画教室が欠けている。ただし、図画教室は地歴教室との兼用室が設けられた。また、理科教室と手工教室には準備室が附属し教授上の便宜が図られ、その他に図書室と標本室が各1室用意された。

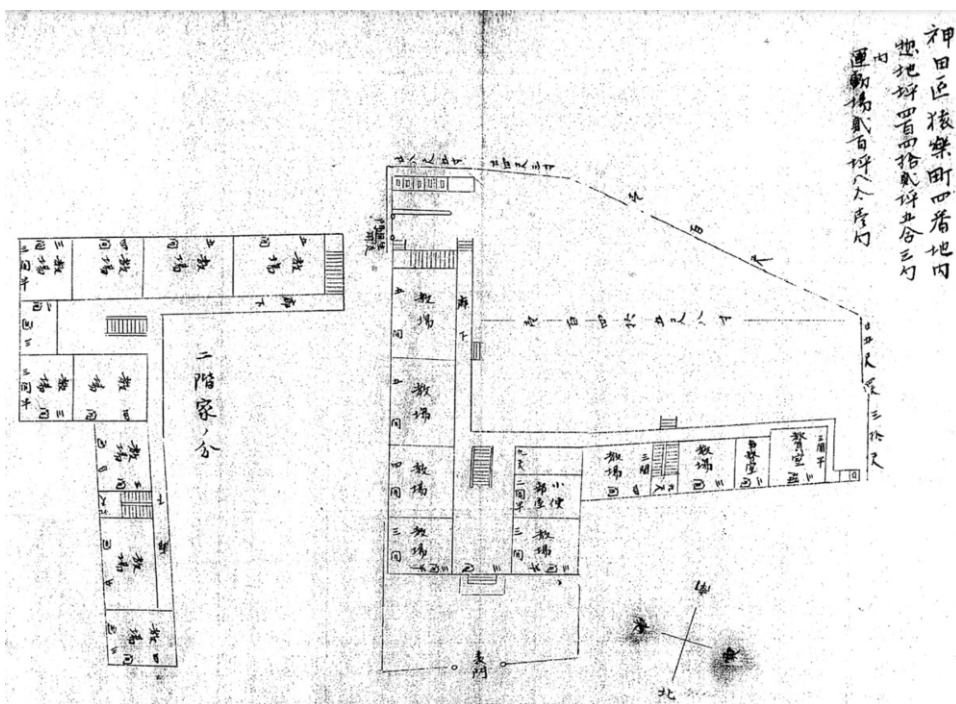
以上の新校舎の構造がいかなる性格のものとして位置づけられるかを確認するため、旧校舎との比較を行う。まず、図2により明治23年時点の校舎と比較するならば²⁸⁾、当時の校舎は普通教室(教場)+教員室+事務室+小使部屋と非常に簡素で特別教室はなく、小学校教育を行う上で余分なものがない、「ハコ」とも言うべき最低限の設備になっている。

明治末の児童増加に対処するために新築された大正元年竣工の校舎は、830坪の校地に木造二階建、一部三階建の構造で建てられた。当時公立小学校で木造三階建は珍しく、全国的な名声を得たとされる²⁹⁾。東側には屋内体操場、西側には玄関や裁縫室等をもった二階建の校舎があり、北側が三階建校舎という配置であった³⁰⁾。教室数は、普通教室20室のほかに

[illegible][illegible][illegible]

（注：此子於生後僅在四個月前）

図1 復興新校舎の平面図



出典：「改築認可 錦華小学校」(明治23年『指令録 公立小学校』、618-B2-20、27)

図2 明治23年の校舎平面図

特別教室を3室設けていた。また、図書機械標本室や屋内体操場も備え、屋上には庭園も設置されたようである³¹⁾。復興新校舎の特徴の一つである屋上庭園は、この大正元年校舎のとき、すでに取り入れられていた。

上記大正元年校舎は、前章で述べたように、わずか3ヶ月で焼失してしまい、大正4年に再建された。このとき、校地が現在地に移転しており、学校規模の拡大にあわせて、敷地面積も830坪から1600.77坪と倍近くなった。この再建新校舎は木造二階建て959坪、学級数は24学級と大正元年の校舎からさらに4学級増え、特別教室も1つ増えて4室になった。この他、器械標本室2室、図書室1室、屋内体操場が2ヶ所設けられた。明治中期において、必要最低限の簡素な設備であった学校建築が、大正期における二度の新築を経て、学校規模が拡大するとともに、特別教室や標本室、図書室等の自由教育的教育実践に対応する諸設備が段階的に備わっていったことがわかる。したがって、復興新校舎は、大正期を通じた学校建築改善の集大成として位置づけられるだろう³²⁾。

2-2. 内部設備の教育学的分析

前節では、錦華小復興校舎の基本構造を旧校舎との比較を交えて確認したが、さらに校舎の内部設備を教育学的観点から読み取ってみよう。

学校建築計画で重視されるのはまずプランニングで、とくに特別教室の配置は最も重視される点の一つである。騒音の発生しやすい特別教室、とくに手工教室は、他クラスの授業を妨害しないよう普通教室からできるだけ遠い、いわゆる翼端配置がとられる。錦華小の場合も、最も音が出やすい手工教室は、普通教室から最も遠い位置である1階南端に設けられている。普通教室との間には、昇降口や衛生室・職員室を挟んでおり、上の階も理科教室が配置されている。同様に、2階の両端には理科教室と唱歌教室が位置しているが、裁縫室だけは翼端に置かれていない。

普通教室に関しては、1階教室の校庭側には扉が設置されていることが読み取れる。これは児童がすぐ校庭に出られるようにとの意図が含まれている。

次に、教室以外の諸設備に焦点を移してみよう。自学主義を標榜する同校の教育方針を踏まえれば、

児童図書室は欠くことのできない設備といえる。前節で述べたように、図書室は大正元年校舎のときから設けられていた。昭和初期の時点で蔵書1万冊と言われる復興後の児童図書室は、昭和2年より放課後1時間ほど児童に開放されることとなり、児童の自学自習に供された。開放初日から入場者があふれるほどであったと回想されている³³⁾。

同校の教育方針とのかかわりでは、廊下のギャラリー機能が注目される。図面からは分からないが、廊下には児童成績品が陳列され、ギャラリーとして活用されていた³⁴⁾。高羽校長以来の「錦華式粘土」や自由画教育など、手工・美術教育による児童の主体的活動を重んじる教育においては、その成績品を陳列することで、児童間の相互的な教育効果を高める意図が込められていたと考えられる。理科教室と地歴兼用室に設けられた暗幕映写設備は、活動写真、実物幻灯として教育実践に取り入れられた。当時、幻灯や活動写真が急速に学校教育の現場に広まり、教材も多数作成された³⁵⁾。

校舎外に目を移すと、校庭の東南隅に庭園が作られており、そこには池、砂場、運動器械が設けられている。また、花壇や植込み、あるいは水呑場、手洗、足洗が屋外体操場の周辺に多数作られている。これは、先述した1階普通教室の校庭側扉とともに、児童の屋外活動を重視する教育観を示している。花壇は、屋外体操場だけでなく屋上にも作られ、そこにはベンチも置かれていたことが図面に描かれている。敷地内に多く見られる学校園の機能は、児童中心主義的教育観の表れであり、かつ衛生上環境上の配慮とも言えるだろう。

明治期より関心の高まっていた衛生に対する配慮は、学校園の設置以外にも見られる。校舎は敷地の西北方にコの字型に配置され、教室は主に東南側で、西北側に廊下を設けている。これは「採光通風二便」するためと説明されている³⁶⁾。また、電気・ガス・上下水道・スチーム暖房といった近代的諸設備を設置している。これは、東京市の強い方針で、とくに衛生思想の普及・啓蒙を意図して導入された水洗式便所は、当時下水道普及率が非常に低かったため³⁷⁾、教育関係者から賛否として反対論も出たが、復興小学校のランドデザインを決めた東京市建築局長佐野利器の強い要望により導入された³⁸⁾。

次に、屋内体操場を見てみると、奉掲所と演壇が設けられている。東京市は、屋内体操場を講堂兼用

と考えており、後者の機能を主とする方針であった³⁹⁾。しかも講堂は学内のみの利用に限定するのではなく、むしろ外部に積極的に開放された公民館的施設として想定されている。錦華小の場合、屋内体操場脇には体操場利用者専用の屋外便所が用意されており、屋内体操場と校舎の間には第二昇降室が別途設けられ、その昇降室が扉を介して錦華公園につながっている。講堂の外部利用を想定した動線計画となっていることが分かる。

屋内体操場は、震災後実際に地域社会の利用に供していたことが史料から判明する。錦華小学校公文書綴『〔昭和十年度 公文書〕』（お茶の水小学校所蔵）には、活字で印刷された用紙「校舎使用通知」が綴られている。その通知書は、「使用者」欄には神田区防護団長の氏名、「使用ノ目的」欄には「防護団週間ニ於ケル講演及映画会」と、それぞれ手書きで記され、使用する「建物ノ屋室」欄には活字で「屋内体操場外一教室」とある。これは地域諸団体による屋内体操場の利用が日常的であったことを示している⁴⁰⁾。

こうした屋内体操場の新機能は、旧校舎時代のものと比較すると、その性格が明らかになる。大正4年校舎の屋内体操場は、二階建校舎の階下（1階）に79.956坪、別棟の平屋建体操場が28.749坪であった⁴¹⁾。復興校舎の屋内体操場が、120坪高さ7mの広大な空間を備えていたことと比較してかなり狭い。大正11年の創立50周年記念式典は、屋内体操場が狭いため校庭に式場を設営したというエピソードが残されており⁴²⁾、明治期の屋内体操場が「器械」体操場だった⁴³⁾こととあわせて考えれば、震災前後で屋内体操場の性格付けが大きく変化していることが分かる。「雨天体操場も普通とは違つて式場にも使はれ…」⁴⁴⁾という回想は、それを裏付ける証言である。

以上、錦華小の復興校舎につき、その校舎・諸設備を概観した。校地の外周に沿うように建てられた校舎の配置、北側片廊下に沿って連なる画一的面積の普通教室、などといった面ではたしかに明治以来の平板な設計プランである。しかし、その細部を注意深く観察すると、校舎・設備のあらゆるところに教育的配慮が見受けられ、子どもや教師、あるいは地域社会の人々に、学校建築がどのように利用されるかが考慮されている。錦華小の復興校舎は「当時東京市自慢のモデル校舎」で、視察に訪れるものが多く、とくに参観案内係を設けるほどであったよう

である⁴⁵⁾。錦華小の校舎に組み込まれた、教育的意図にもとづく学校建築のあり方は、他校への波及効果が大きかったのではないかと考えられる。

2-3. 利用者による学校建築の認識

(1) 児童が感じた学校建築

復興小学校の中ではかなり早く竣工し、「モデル校舎」としての性格を持った錦華小学校は、施設利用者、つまり児童や教員の目にはどのように映ったのであろうか。

小学5年生のある男子児童は、「見上げるばかりの新校舎、広々とした運動場、僕等は其の立派な生徒であると思ふと、実にうれしい。理科室、手工室、唱歌室、図画室等僕等にとっては勿体ない程設備が完全に調つてゐる」⁴⁶⁾と、広くなった運動場や、新校舎の「完全に調つてゐる」特別教室に喜びを感じている。また、別の女子児童は以下のように感想を記している。「一足新校舎の中へ足を入れた。其の時の感じ、其の時の嬉しさ。生がい忘れることはできないであらう。今まで入つてゐた校舎から見れば別世界のやう。私たちが二人や三人ではかゝへきれない太い柱、家のつくり、総べてが想像以上である。……第一に私の目を引いたのは理科室であつた。……広々した教室には大きな机がずらりと並べてある。……次に心をうばはれたのは唱歌室である。四方には美しい鏡が着いてゐる。今にピアノも置かれると言ふ話。私は夢中になつて見てゐた」⁴⁷⁾。新教育の象徴的存在とも言える理科教室に着目する一方で、鏡やピアノといった設備に関心を持っているところは、運動場に注目する先の男子生徒とは異なる着眼点である。両者に共通して言えることは、校舎・敷地の広さや特別教室の設備に対して注目しており、校舎の拡大とともに、新しい設備を備えた新たな教育活動に対する期待感が行間に読み取れる。一方で、児童が感じたこの多大な期待感は、震災後における教育環境の劣悪さの裏返しとも言えるのではないか。

校舎建設期間中に子どもたちが感じた「惨めさ」については、学校創立記念誌で多くの卒業生が回想している。復興校舎建築の際は隣接小公園に仮校舎を建てたが、大正期に度重なった校舎建て替えの際は、近隣の小学校に間借りする形で授業を行った。大正元年新築のときは一橋高等小、大正4年新築のときは一橋高等・小川・西小川の3校に分かれることになった⁴⁸⁾。間借りしている間、子どもたちは肩身

の狭い思いをし、さらに二部教授の形態での間借のことが多かったため、教育環境として望ましいとは言えない状況だった。例えば、大正3年卒の田中貞三は、在学中に二度の学校新築を経験している。回想の中で田中は「新築だ、火事だ、新築だで殆んど二部教授や間借教育しか受けなかった」と、恵まれなかった自身の教育体験を記している⁴⁹⁾。

前章でも紹介した波多野完治は、創立八十年記念誌の寄稿文を「わたしたちは校舎にめぐまれなかった。」という一文で切り出している。波多野は大正6年卒であるため、入学時は新校舎建設中であつた。1年時に一橋高等小に「借家ずまい」で、ようやく新築の教室に入れたと思ったら、新築の校舎が神田の大火によりわずか3ヶ月で焼失してしまった。「二年、三年、四年、という、あばれざかりを、他人の学校ですごしたのは、つらかった。勿論二部教授のひる組で、かえりはくらくなることも多かった」と、少年時代の「間借生活」の惨めさを綴っている⁵⁰⁾。

波多野と同級の永井龍男も、回想の冒頭を自らの校舎体験で始めている。「錦華小学校の校舎で勉強した時間は、卒業するまでの六年間を通じて極く僅かだった」と、波多野と同様、校舎建設に伴う教育環境の貧しさを述べている。神田大火後の二度目の間借では、「遠い一橋高等小学校にも、西小川学校にもカバンを下げて、肩身狭く通学し」、「他校への間借りの上の二部教授だから、その頃のことを思い出すと、いまでも子供心の佻しさが自づと湧いてくる」⁵¹⁾と当時の思い出が語られている。

錦華小に限らず小学校の創立記念誌等に寄せられた回想録や座談会の記録では、一般に校舎や教室、運動場等学校建築について言及するものが多い。その事実からも、学校建築が子どもの心性に与える影響の大きさが読み取れる。東京市のような建築物密集地における木造校舎は、火事の類焼等の影響を受けやすく、耐久性も低いため、建替えのサイクルが短い。そのため、間借や二部教授といった状況が生じやすく、子どもに心理的悪影響を与えやすい。その点、耐久性の高いRC校舎は、実践の安定性が図れるという長所があると言える。子どもの発達における心理面への影響を考えれば、校舎の耐久性もまた、広義の「教育的機能」と言ってよいだろう。

(2) 校長の学校建築論

一方、教員の側は復興新校舎をどのように受け止

めたのであろうか。『復興記念誌』には、前章で触れたように、「本校の教育方針」として「独立自治博愛共存」の精神や「自発的学習」が挙げられている。そこではさらに、「特別教室を設け児童図書室、教材室、学校園、其の他各種の設備を施して、成績の向上をはかる」⁵²⁾としており、教育実践と学校建築が密接な関連を持つことが示されている。こうした、復興校舎の建築と教育実践の関係について、後藤校長が『校報』第12号巻頭の講話で詳細に述べており⁵³⁾、その認識が復興校舎の設計時にも影響を与えたと考えられるので、以下で詳しく見てみたい。

まず、学校教育に関する時代認識として、「主知主義の教育が主意主義の教育となり、教師万能の伝達的教授は児童中心の活動的学習となり、強迫的な器械学習は発動的な研究学習となつて、児童の知能開拓の方式が一段と変つた」と自身の認識を示している。そして、教育の「補欠大成の上に必要なのは学級定員の減少と学習設備の完成」が必要であると述べて、学校環境の整備を実践上の欠くべからざる条件であると述べる。そして、この度の復興小学校建設に際して、特別教室や児童図書室、学校園、附設小公園等にも「多大の注意を払はれて、新学習施設の上に便せられたことは多謝すべき」と、復興小学校の新教育的学校建築を評価している。

そして「本校新校舎は、上記の〔校舎設計方針の一引用者注〕趣旨によつて勿論善く設計せられてゐるが、特に、特別教室は、二十四学級なるが故に、理科手工、唱歌裁縫の四室然かも二十四坪三十三坪三十七坪といふ広さを有し、且つ、普通教室にも二十四坪といふ広さを有する大室が三室も出来て、内二教室は図画地歴の兼用特別教室として使用することが出来、児童図書室も普通教室と同面積の広さをもち、凡てに、大に児童の発動的な研究学習設備を営むには好都合である。／凡そ新主義の斯の発動的自学的学習には、観察実験実習調査といふやうな学習行動や作業が特に必要で、然かも学習作用の大部を占めてゐる。」と述べて、錦華小の新校舎が、児童の発動的な自学的学習や実験・観察・調査等を重んじる学習に、適切な構造を持っていることが説明されている。

第1章で復興校舎の建設過程を整理した際、市側の略設計に対して学校が意見書を提出するプロセスに注目した。このとき、上記のような後藤校長の教育観が、どのような形で学校建築に反映されたかは

不明である。しかし、大正14年6月に行われた校長の関西学事視察について、「今年竣工の本建築校舎の外観内容の整備は、前年の旅行と相俟つて此の旅行に負ふ所が多い」と評価されており、また同年9月には、校長の片腕とも言える藤原訓導が、京都・大阪・名古屋・神戸・奈良といった関西の代表的市において学校設備の調査を行っている⁵⁴⁾。こうした、学校側の調査・研究の成果が市側の設計方針と協同した形で、学校建築の教育的機能化が図られたといつてよいだろう。

まとめと今後の課題

本論文は、錦華小学校の事例をもとに、復興小学校の学校建築が様々な教育的機能を備えていることを指摘した。理科・手工などの特別教室はもちろんのこと、児童図書室や学校園などの諸設備が備えられて、大正期の自由教育的教育実践に適合的な学校環境が構築されていたことが明らかになった。また、旧校舎との比較から、こうした学校建築の機能は、明治から大正にかけて徐々に増設され多機能化してきたことが判明した。復興校舎はその集大成的位置づけと考えてよいと思われる。また、学校建築の教育的機能は、学内の教育実践のみに配慮されていたわけではない。講堂兼用の屋内体操場が、地域に開かれた社会教育的施設として機能するように、諸設備の配置や動線計画がなされていた。

このような学校建築の教育的諸機能は、東京市側の建築思想とともに、学校側の教育観の影響も受けていたと推測される。明治末に赴任した高羽校長以来の自由教育的校風を受け継ぐように、後藤校長は自学主義による児童中心主義的教育観を持ち、学校建築の教育的編成にも自覚的であった。校舎設計段階で学校側が2ヶ月間の検討期間を与えられたことや、校長や教員が学校建築の視察を精力的に行っていたことを考えれば、錦華小の学校建築に学校側の教育観が盛り込まれたと推測するのは、不自然なことではないだろう。そして、「東京市自慢のモデル校舎」であった錦華小に、他校からの参観者が多数訪れたことから、錦華小の学校建築が他の復興小学校の設計にも影響を与えたであろうと思われる。

しかし、本設計作成過程において、学校側の意見が具体的にどこに反映されたかは、錦華小の史料からは明らかに出来なかった。この点については今後

の課題として残しておきたい。また、復興小学校の学校建築は、地域社会との関係を論じることが重要である。第1章で触れたように、錦華小の復興を、児童保護会・同窓会・町会の三者連合による復興後援会が支援した。学校設備の充実化は復興後援会の募金活動に依るところが大きい。この「復興後援会」の存在は複数の学校で確認できる。序章で述べた、「地域の中心としての小学校」という二つ目の特徴を明らかにするためには、この復興後援会の分析が必須となるが、この点に関しては、別稿にてあらためて論じたい。

註

- 1)「教室 コの字革命」『朝日新聞』2008.5.2(夕刊)、第13面。上野淳『学校建築ルネサンス』鹿島出版会、2008など。
- 2)長倉康彦『開かれた学校』日本放送出版協会、1973など。
- 3)佐藤秀夫『校舎と教室の歴史』『教育の文化史2 学校の文化』阿吽社、2005、p.161(初出1978年)。「【座談会】生きられる学校建築」『学校建築の冒険』INAX、1988、p.43など。
- 4)藤岡洋保『東京市立小学校鉄筋コンクリート造校舎の設計規格』『東京市立小学校鉄筋コンクリート造校舎の外部意匠』『日本建築学会論文報告集』290・300号、1980.4・1981.2。小野雅章『関東大震災と学校の復興—東京市の復興過程を事例として—』『関東大震災後における学校教育の変容過程—1930年代中頃までの東京市を事例として—』『日本大学文理学部人文科学研究 研究紀要』56・58号、1998・1999。東京都立教育研究所編『東京都教育史 通史編 三』1996。
- 5)小林正泰『関東大震災後の小学校建築—「復興小学校」の全容と東京市建築局による学校設計—』『東京大学大学院教育学研究科紀要』第46巻、2007。
- 6)学校の沿革は主に次の史料による。『東京市錦華尋常小学校沿革誌』1922.5。創立百年記念会記念誌委員会編『錦華の百年』1974。
- 7)人文社編集部『江戸から東京へ 明治の東京』人文社、1996、p.24
- 8)東京都千代田区立錦華小学校『錦華 創立八十年記念誌』1954、p.53。
- 9)前掲『錦華の百年』p.69。
- 10)前掲『錦華 創立八十年記念誌』p.42。
- 11)以下高羽校長の略歴は、同上、pp.39-41。前掲『錦華の百年』pp.73-74など。
- 12)あまりにも参観者が多いため受付担当の教員がいた(前掲『錦華の百年』p.75)。また、震災復興校舎には受付が図面に描かれている(「〔東京市錦華尋常小学校設計図面〕」刊行年不明—ただし欄外に「錦華小学校復興後援会 寄贈」と印刷されているので、復興校舎落成前後の史料と思われる)。
- 13)以下後藤校長の略歴は、前掲『錦華 創立八十年記念誌』pp.41-42など。
- 14)東京市錦華小学校『錦華 復興記念 15.10.15』1926.10、p.18。
- 15)上島訓導については、前掲『錦華 創立八十年記念誌』pp.53-55。「永井龍男年譜」『永井龍男全集 第十二巻』講談社、1982、p.417。および、前掲『錦華の百年』pp.51-52。
- 16)錦華小は尋常高等併置校であったが、神田区は義務教育年限延長とともに年限2年の一橋高等小学校を特設したため、6年制尋常小学校となった。
- 17)錦華尋常小学校『沿革誌』1913-1926。
- 18)「焼失区域内小学校ノ位置ニ関スル件回答 麹町尋常小学校他115校」(大正13年『雑件』305-E6-16、18—東京都公文書館所蔵)。
- 19)前掲『錦華 創立八十年記念誌』p.41。
- 20)前掲『沿革誌』1913-1926。
- 21)同上。
- 22)小林前掲論文、p.27。
- 23)前掲『錦華 創立八十年記念誌』p.42。
- 24)校舎建設の日程は以下の史料による。前掲『錦華 復興記念 15.10.15』pp.8-11。東京市役所『東京市教育復興誌』1930、p.308。「校舎新築 錦華尋常小学校」(大正14年『市立学校』306-F2-12、2)。「建設費補給金精算返納書 錦華尋常小学校」(昭和2年『小学校』312-B8-20、1)。
- 25)前掲「〔東京市錦華尋常小学校設計図面〕」。
- 26)小林前掲論文、p.27
- 27)「東京市立小学校建設費補給規程施行細則」第2条(『東京市広報』第1161号・号外、1925.12.26)。
- 28)「改築認可 錦華小学校」(明治23年『指令録 公立小学校』、618-B2-20、27)。
- 29)前掲『錦華の百年』p.55。
- 30)前掲『錦華 創立八十年記念誌』p.40。
- 31)前掲『東京市錦華尋常小学校沿革誌』p.18。
- 32)その後の学校建築と比較して不足している設備はプールくらいであろう。錦華小にプールが設置されるのは、昭和16(1941)年のことである。このプールは、時節柄貯水槽との兼用として設けられた(前掲『錦華の百年』

- p.172)。
- 33) 前掲『錦華の百年』 p.82。
- 34) 1 階校庭側の扉や廊下のギャラリー機能は、復興小学校の基本プランニングを作成した東京市学校建築課の古茂田甲午郎もその著書『東京市の小学校建築』（建築学会、1927）で指摘している。
- 35) 練屏尋常小学校『校舎建築資料 其六』（平成小学校所蔵）に綴られた、「尋常小学校教材に利用すべき映画」と題した史料には、約100作品の一覧が掲載されている。
- 36) 図1「〔東京市錦華尋常小学校設計図面〕」の「設計概要」欄参照。
- 37) 永島剛「感染症統計にみる都市の生活環境 ―大正期東京の腸チフスを事例として―」『三田学会雑誌』第97巻第4号、2005.1。
- 38) 佐野博士追想録編集委員会編『佐野博士追想録』1957、p.25。
- 39) 古茂田前掲書、p.28。
- 40) また、昭和期に入って、学校施設の外部利用が高まったことが先行研究で指摘されている（小林前掲論文、p.26）。
- 41) 前掲『東京市錦華尋常小学校沿革誌』 pp.45-46。
- 42) 前掲『錦華 創立八十年記念誌』 p.41。
- 43) 錦華尋常小学校『沿革誌』1898-1912、明治31年7月9日の記述より。
- 44) 前掲『錦華 復興記念 15.10.15』 p.16。
- 45) 前掲『錦華の百年』 p.75。
- 46) 前掲『錦華 復興記念 15.10.15』 p.16。
- 47) 同上、p.17。
- 48) 前掲『錦華 創立八十年記念誌』 p.40。
- 49) 同上、p.52。
- 50) 同上、p.54。
- 51) 同上、p.53。
- 52) 前掲『錦華 復興記念 15.10.15』 p.19。
- 53) 東京市錦華尋常小学校『校報』第12号、1926.3、p.13。
- 54) 同上、p.22。本建築起工後も学校側の要望が取り入れられる形で、度々設計変更がされている（前掲「校舎新築 錦華尋常小学校」）。
- 注記：本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金研究「1910-20年代東京市公立小学校における教育改造」（研究代表：土方苑子、課題番号17530552）による研究成果の一部である。